

## 先輩、知友に恵まれた父

大平 裕

父は、内閣・自民党葬、香川県民葬、そして地元合同葬を通じ数え切れぬほど多くの方々よりお別れをいただきましたが、振りかえれば、父ほど、先輩、知友に恵まれた人は少なかったのではないかと思われます。それは、私どもが存じている限られた範囲でも、うらやましく感じられるほどのものでございました。苦学の時代、在官の時期、さらには二十八年間に互る政治を通じて、晴れの時も、雨の時も、父は先輩知友の方々の変わらぬご友情とご好意に支えられて参りました。みなさま方のお力添えがなかったら、父は決してあのような大任を負う光栄にあずからなかつたことでございますよう。

それだけに、父はつねづね、政務公務の多忙にまぎれて、みなさまのこうしたご厚誼に十分におこたえできないことを苦にいたしておりました。晩年には、政局の安定をはかり、国の政治の路線を確かなものにした上で、できるだけ早く職を退き、これまでのご恩返しをしたいとたびたび口にいたしておりました。親しいみなさまとゆくりなく語りあったり、ご一緒にゴルフを楽しんだりしたいという気持ちもあつたことでございますよう。郷里の讃岐の野や山も父を呼んでおりました。察するところでは、父は七十歳を政治生活の区切りと考えていたようでございます。そして、それは、私ども家族もひそかに願っていたところでした。

しかし、神はそうした余裕を与えることなく、慌しく父を天に召してしまわれました。もはや父がみなさまに直接にお目にかかつてお礼を申しあげることではできません。私ども家族は、父がみなさまから賜ったご恩の大き

さを考えて身のすくむ思いをいたしております。いまはただ、私ども一人一人が立派に生きて行くことのみが、ご恩の万分の二でもお返しすることになるものと思うほかはございません。

父はいま天に在って、すでにここに籍を得られた恩師の中井虎男先生、上田辰之助先生、また官界への扉を開いてくださった津島寿一先生、さらには政界の導師、池田勇人先生をはじめ、多くの恩人の方々にお目にかかり、往時への感謝を捧げつつ、心おきなく歓談を交わしていることでございましょう。また、生前最も愛しておりました長男正樹、親代わりをつとめた義父鈴木三樹之助と三人で愉しかった想い出話に興じているかとも考えます。

思えば、数知れぬ方々に、鍛えられ、励まされ、愛され、そして後輩の方々に慕われた父の一生は、恵まれた、幸せな七十年でございました。ここにみなさまに深く感謝申し上げる次第でございませぬ。

さて、さらにその上に、このたびは、有志の方々のご尽力により、亡き父を慕う回想録の刊行計画が立てられ、その第一巻、追想編が一周忌を前にして刊行されるとのことでございます。ご多忙の中に追想文をお書きいただいたみなさま、刊行の実務にご努力いただいたみなさまの重ね重ねのご芳誼に、家族一同お礼の申し上げようもございません。

事務局からは、私にも謝辞とともに何か想い出を書けということですが、思いたすのは、すでにみなさまがご承知のことばかりでございます。老若を問わずお客さまの来訪を歓迎し、家族の団樂を楽しみ、静かな読書を好みました父の姿が浮かんできます。学生時代、私が友人を大勢連れて帰って、賑やかに騒いでいると、必ずその仲間に入ってきてユーモアを飛ばしながら、よく若者たちの話を聞く父でした。親しい友人がわざわざ訪ねて下さったのに、家族の手違いで、お会いすることができなかったとき、きびしく叱られた以外には、怒られた記憶もありません。優しいというか父は子供たちにもシャイだったのでないでしょうか。

(故大平正芳氏次男)